
気まぐれ猫の散歩

月猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気まぐれ猫の散歩

【Nコード】

N3341Z

【作者名】

月猫

【あらすじ】

人に疎まれ、苦しい思いをしてきた、元猫・現在妖怪の彪ヒョウ。妖怪や、霊が見えてしまい、気味悪がられてきた両親のいない少女、ほたる。

そんな2人が出会って、いろいろと学んでいきます。

記憶（前書き）

初めまして。月猫つきねこです。

。思いつきでやっているのですが、どのくらい続くかビミョーですが・・・

宜しく願います。

記憶

辛い事、悲しい事、いろいろあったさ。

人は、嫌いだ。ずっと一緒とか言っつて、優しいフリしてすぐ裏切る。もう期待して、裏切られるのはごめんさ。

なのになぜ、こんなことになったのかな・・・？

誰か教えてよ。

私の名は、彪^{ひょう}。オス。1番最初に、飼ってくれた人がつけてくれた。1番はじめに飼ったくれたのは、年老いた、おばあさんだった。わたしは、まだ子猫だった。この人は優しくしてくれた。まだ目も開かないうちに捨てられた私を。幸せだったけど、そう長く続かなかった。おばあさんが死んでしまった。引き取り手がないわたしは捨て猫となった。

そうしているうちに、今度は男の子に拾われた。大切にしてくれたけど、大きくなるにつれて、相手にしてくれなくなった。そして、疎まれるようになった。この時、わたしは4歳。男の子の家を飛び出し、再び、捨て猫となった。

次は、大人の男に拾われた。男は一人暮らしをしていた。アパート暮らし。狭くて、汚い部屋だけど、仲良く暮らしていた。けれど世の中は、不景気になっていた。男は、会社をリストラされた。1日中家にいて、段々と私に八つ当たりするようになった。酒癖も悪くなくなっていった。ある日、いつものように八つ当たりされた。抵抗したけど、意味は無く・・・。そして私は死んでしまった。私が7歳の頃。

死んでからも、死にきれず、ついに・・・。妖怪となってしまうた。妖怪となった私はもう、猫ではない。真っ白で、トラック1台分はある。耳は後ろに倒れ気味で、尾は長く、フサフサ。大犬の姿に似

ていた。それでいて、猫の姿にも戻れる。白くて、丸い姿に。尾は、丸くて短いけれど。何やら妖力ちからも強いようだし……。これなら、もう、人の世話になんかならなくて済む。私は自由になった。

ほたるの苦しみ(前書き)

更新遅れて、すみませんでした。

これからもこんなことがあったりするかもしれないですが、よろしく
お願いします。

ほたるの苦しみ

5歳の頃、私は両親を亡くした。

五ヶ瀬ほたる。中学2年生。

わたしには、秘密がある。それは、この世の者でないもの。信じてもらえないだろうけど、妖怪や、霊が見える。

両親を亡くしてからは、親戚を転々としてきた。しかし、わたしは妖や霊を見る、不気味な子。周りの人から見たら、嘘つき、気味悪い、変な子、というふうでしかない。そのため、だれもきちんと引き取りたがらなかった。

今住んでいる家の人は、母方の遠縁。今までにないくらい、優しい人たちだった。こんなにもいい家はない。ずっとここにいたい。この人たちに、不気味な思いはさせたくない。そう思って、妖怪や霊を見る事は、秘密にしている。

けれど、家にいたら、いつかその事がバレそうで……。学校が終わると、近くの森の中で過ごす事が多くなった。

ほたるの苦しみ(後書き)

感想待ってます

出会った

今日は、雨が降っている。普通だったら、森になんか行かない。ほたるは、森の入口で立ち止った。

普通だったら・・・。

そう思っていたのに、森の中に入って行ってしまった。

来てしまった・・・。

とにかくため息をつくしかない。まあ、雨も少ししか降っていないし、少しくらい良いか。

その時だ。

ドスン!!!!!!

後ろで音がした。ドキドキしながら、恐る恐る振り向く。そして悲鳴を上げそうになった。思わず腰が抜けた。後ろにいたのは・・・。大きな獣だった。白くてとにかく大きい。目は、銀色。耳が後ろに倒れ気味。尾がとにかく長い。

「む。なんだ、人の子か」

低い声。多分これは・・・。

「妖怪なの？」

「当り前だ」

そりゃ、そうだろう。これが、普通の動物なわけがない。

「お前には、私が見えるのか？」

「まあ・・・」

話も出来るし、見えている。

「雨が降っているのに、何をしている」

そこまで来て、やっと落ち着いた。はたると立ち上がる。

「関係ないでしょ」

「ふん。ふてぶてしい奴だ」

そんなこと、妖怪に言われたくない。

「あんたこそ、突然何よ」

「少し散歩してただけだ」
そういえば、コイツには話を通じる。ほたるは、もう少し話してみ
ることにした。

稲荷神社で……。

雨がやんだ。ほたるは傘を閉じた。

「さつさと帰れ」

大きな獣が言った。

「なによ。ここにいてはだめなの？」

ムツとしたように聞いた。

「お前、人間だろう？私が怖くはないのか？」

「そりゃあね。怖いけど。でも、私の事を食べたりしないでしょ？」

大きな獣がため息をついた。

「ふふ。妖怪とこんな長くはなしたの、初めてだよ。あんた、名前は？」

大きな獣はじつとほたるを見つめた。そして突然……。

どろん

小さな猫になった。

「わあ……。なんなの？その姿」

「気にするな。どちらも本当の姿だから。私は彪だ」

「私、ほたるっていうの」

猫姿になると、あまり表情が変わらない。

「では、ほたる。人の子があまりここへ、一人で来るんじゃない」

「なぜ？」

「ここは妖が多い。見えるお前なぞ、食われてしまいかもしれないぞ」

彪は目を細めてからかうような口調で言った。

「そうなの？忠告ありがとう。でも、ここはわたしの大切な居場所でもあるの……。ねえ、明日も来ていい？」

「私はここへは来ないよ」

そう言われても、ほたるは来るつもりだった。それが彪にも伝わっている。

「バイバイ、彪」

ほたるは手を振って別れた。

帰り道。かなりテンション高めで歩いていった。

「その人の子」

突然横から声が出た。ほたるがきよるきよるした。

「おーい」

精一杯呼んでいる。声のする方を見た。そこにあるのは……。小さな祠のある稲荷神社だった。

「おーい。人の子ーい」

小さな声。

「誰かいるの？」

ほたるは恐る恐る、足を踏み入れた。そして、祠の前に来た。

「えーっと……」

「ここだ。こつち、こつち」

もつと下の方からだ。下を見ると……。

「ふう。やっと気が付いた」

「……わあああああ！？……と。小さな妖怪か」

祠の下には、着物を着た小さなおじさんがいた。こついつのにも、もう慣れた。

「何か用？」

「うーむ。やっぱり、見えるのか」

おじさんが言った。

「見えるよ。私はほたる。……君の名前は？」

「私は葛の木。ほたる、少しの間、力を貸して頂きたい」

力を貸す？今までそんなこと、言われたことない。

「……厄介なことじゃ、ないよね。あまり関わりたくないような……」

「そんなこと言わずに。忘れられたこの場所に住んでる、わたしのたった1つの願いなのだ」

葛の木は泣きながら言った。ほたるも、泣かれてはかなわない。

「分かったよ。何すればいいの？」

「おお。ありがたい。手伝ってくれるか」

葛の木は大喜びしている。ほたるは、はあーっとため息をついた。

稲荷神社で……。 (後書き)

どうだったでしょうか。感想、意見頂けたら嬉しいです。

彪が猫姿の時の姿には、いろいろ理由がありますが、私の想像したのだと……。

尾が短いのは、野良猫時代にケンカして……。ということですよ。

街中にそういう猫がいると悲しくなります。太っているのは、人間から解放されて、沢山美味しいものを食べたから、という設定にしています。

また、読んで頂けると嬉しいです。

忘れられた場所

「それで、何をすればいいの？」

「まあ、話を聞いてくれ。．．．おつとその前に．．．」

葛の木は、祠の奥に行き、戻ってきた。

「．．．。何？そのお面．．．」

葛の木は、狐のお面をしていた。

「失礼な。私は狐の神なのだ。面をしたままでは失礼だから、面を外して挨拶したのだ」

「えー！．．．！？かつ．．．神様だったの！？くつ．．．葛の木様．．．」

ああ。タメ口、無礼三昧．．．。崇られる．．．。

「はは。気にしなくていいぞ」

なんて心の広い神様なのだろう。

「実はね．．．。ああ、ちょうど来た」

「ちょうど来た？」

葛の木様が見ている方には、若い女の人だ。

「まさか、あの人が好きだから、告白したい．．．とか？」

「阿呆。違う。まあ、見ておれ」

「あら。こんにちは」

突然、後ろから声がした。振り向くと、若い女の人だった。

「こ．．．こんにちは」

慌てて返す。

「見る。この人を．．．」

葛の木様は、ヒソヒソと言った。言われたとうりにする。そして、ビックリした。

「見えるか？」

黙ってうなずく事しか出来ない。女の方は、お供え物をして行ってしまうた。

「な、な、見えただろうか？」

「うん」

女の人に憑いていたもの。それは……。

「あれは……。妖怪？」

「そうだ」

黒くて、恐ろしい妖だった……。ほたるは葛の木を見つめた。葛の木は語りだした。

あの女の人は、若菜さんといって忘れられたこの場所を唯一拜んでくれる人。ところが最近、妙な妖あやしに憑かれてしまったのだ。

「あのままでは、若菜さんの命が危ない。そんな時、お前を見かけたんだ。人の子のくせに、妖力の強いお前に目をつけていたんだ」
実際、若菜さんは力が弱まっている感じがした。

「で？どうしてほしいの？」

「あの妖怪を、追い払ってほしい」

「えっ!？」

追い払う？そりゃあ、出来るならやってあげたいけど……。

「ごめんだけど、私、そんなこと出来ないよ」

「なぜだ。お前ならできる。お願いだ」

葛の木様は泣いている。

「私は、陰陽師とか、神社の神主とか、尼さんとかじゃないんだよ」

「うう……。……」

葛の木様は、ワーワーと泣きだした。ほたるも泣く子にはかなわな
い。

「分かった。分かったよ。出来ることはやるから」

結局、昨日と一緒に流れだよ。それにしてもさっき、若菜さんに憑
いていた妖怪……。何か、変な感じがしたな……。どうしてだ
ろう……。

悪霊被い その巻

翌日。

「おい。葛の木様ー」

学校帰りに、稲荷神社へ寄ってみた。葛の木様は、祠の前に座っていた。

「こんにちは。葛の木様。・・・若菜さん、来た？」

「おお。ほたるか。まだ来てないぞ」

葛の木様は、少々退屈そう。

「そうだ。葛の木様、飴いる？こっそり鞆に入れてきたんだ」

取り出したのは、イチゴ味の飴玉。

「ルール違反はいけないぞ」

そう言いながらも、嬉しそうに飴玉を受け取った。

「甘っ。甘くて、美味だ」

意外に食いしん坊な一面もあるのだ。そんな事していると、若菜さんが来た。

「こんにちは」

若菜さんが言った。

「こんにちは」

ほたるも返す。

「あなたもお参りに？」

「ええ。・・・まあ」

まさか、葛の木様とお話に来たなんて言えない。若菜さんは、ゴホッゴホッと変な咳をした。背中には相変わらず、妖怪が憑いている。若菜さんは、綺麗な花をお供えた。葛の木様は、ほたるの肩に乗って、若菜さんを見つめていた。

「ふふ」

若菜さんは、一人で笑った。

「ごめんなさいね。思い出し笑いをしてしまった」

そして、少し悲しそうな顔をした。

「私、10歳のときに母を亡くしているの。ここは、母との思い出の場所だね。・・・母が亡くなった時悲しくてここで泣いていたら、誰かに頭を撫でられたの。顔を上げたら・・・」
そこで少し黙った。目はどこか遠くを見ている。

「狐の面をした、男の人がいたの。その時はビックリして、逃げ帰ってしまったけど・・・。もしかしたら、この祠に住んでいる神様だったのかしらって・・・」

それだけ話して、帰って行った。ほたると葛の木は、若菜さんの後ろ姿を見送った。

「そんなことをしたの？」

「ああ。若菜さんはすごく悲しそうに泣いていたからね。慰めてあげたくて。私は、笑っている若菜さんが好きだからね」

ああ・・・。葛の木様は、若菜さんのことが好きなのだろう。

「.....」

「ん？何か言った？」

「は？何を言っているんだ？」

でも、確かに聞こえたような・・・。

「...が...」

やっぱり!!

「む。この気配。あの妖怪じゃ」

「えっ？」

聞いた時。

「ホシイ。チカラガホシイ」

シュツと妖怪が来るのが見えた。若菜さんに憑いていた・・・。

「うそーーーーー!!!」

ほたるは、葛の木様を乗せたまま走りだした。

ああ。やはり来ていないか。彪ひょうは、昨日、ほたると出会った場所に

来ていた。しかし、ほたるはいない。何、人間のことなんて信じているんだか。やっぱり帰ろう。

ハアハアハアハア

声が聞こえる。……声？

ハアハアハアハア

ガサガサガ

サ　　サクサクサク

誰か走ってくる。……この匂い。……あッ!!!

ハアハアハアハア

「あつ。彪!!!!!!」

ほたるが走ってきた。その後ろから来るのは……。

「あつつつ」

「彪……なんか……追わ……れて……て」

ほたるは息を切らしてる。

「モーーー。何やつとるんだ」

彪は、追い払おうとした。しかし、妖怪の方も逃げ足が速い。

「ギャッギャッ」

妖怪は、逃げて行ってしまった。

悪霊被い その式

「で、今日は何を連れてきているんだ？」

彪が面倒そうに聞いた。

「これ？これは、葛の木様くさき。稲荷神社の神様」

はあ、とため息をつく彪。

「彪。お願いがあるの。実は……」

ほたるは彪に、事情を話した。

「なるほどな」

彪は、明らかに面倒そう。ほたるは、ずっと気になっていた事を聞いた。

「葛の木様って、神様でしょう？妖怪を被うことなんて、簡単ですよっ？」

葛の木様は、ため息をついた。

「信仰の薄れとか、まあ色々で、妖力ちからが弱まってしまったのさ」

「それで。あんな悪霊をほたるに被ってもらおうとしたのか……」

「悪霊！？悪霊だったの？」

ほたるは驚いた。

「しかも。あいつ、鬼水晶持っているだろう」

彪が、ニヤつとした。

「鬼水晶？」

「昔、この辺を荒していた鬼共を退治しようとした、陰陽師がいたのさ。だけど鬼共の妖力が強くて、結晶となって残ってしまったのさ。それが鬼水晶。手に入れると、妖力が強くなる、妖達あやかしの宝玉なのさ」

ほたるは、葛の木様を見た。

「そんなの、被えないに決まってるじゃん」

葛の木様は、面を付けていて表情が分からない。

「んー。あ、そうじゃ。これを使うといい」
そう言っつて袖から何か取り出した。取り出すと、シュツと大きくな
った。

「・・・!!弓だ。・・・でもね、私撃てないよ」

「何ー！ー！ー！？」

葛の木様の驚きは、半端ない。

「そんなこと言わないでくれよ」

「そんなこと言っつて・・・」

はたるはため息をついた。

「鬼水晶をくれるなら、手伝っつてやっつても良い」

彪の一言に、ほたるも、葛の木も目を輝かせた。

「もらっつていいから、力を貸して」

「若菜さんを助けくれー」

こうして、2人と1匹の悪霊退治が始まった。

悪霊退治 その参

「おい、メシはまだか」

「まだだよ。っていうか、何で、ひょう彪とくすのき葛の木様が家にいるのよ」

そう。悪霊退治をすると決めてから、ひょう彪とくすのき葛の木様はほたるの家に泊まっている。

「人間の手伝いをしてやるんだ。これくらい、当然だろ」

ひょう彪は恩着せがましそうに言った。

「すまんなあ。私まで泊めてもらって・・・」

くすのき葛の木様の言葉に、ほたるはドキツとした。

「そんな・・・ことは・・・」

だって、神様だもの。断れない。

寝る時間になった。

「もう寝るから、静かにしてよ」

ほたるは、「静かに」というところに力を入れて言った。

「おやすみ」

布団に入った途端。

「さあ、飲むぞ」

「おう。酒だ、酒」

くすのき葛の木様とひょう彪が、騒ぎだした。ドタバタと布団の上を走りまわる。

「やんや、やんや」

「ちゃんちき、ちゃんちき」

「うるさい！！！」

ほたるは怒鳴った。今日だけならまだしも、昨日も、一昨日も・・・。

「もう、ちゃんちきするなら、外でやってよ」

「何だよ。かたいこと言うな」

ひょう彪は、デレンデレンに酔っている。

「当り前よ。毎晩毎晩、寝不足で・・・」

「すまんなあ、ほたる」

葛の木様が謝っているけど、今日は言わしてもらおう。ほたるは息を吸った。

「とにかくね。静かにして。それが出来ないなら、出て行って」

「すみませーん」

彪と葛の木様が、声を揃えて言った。ほたるは布団にもぐった。最初こそは、静かだったけど段々と・・・。

「ギャハハハハ」

「やんや、やんや」

うるさくなつた。ほたるはイライラした。

「出て行け。この酔いどれ」

と、1人と1匹を、窓からポイ捨てした。

次の日。この日は、土曜日で学校は休みだった。ほたると、彪は葛の木様と一緒に、若菜さんを待っていた。そして、この日も若菜さんは花を持って現れた。悪霊は、相変わらずだ。若菜さんも、具合悪そう。花をお供えすると、さっさと帰っていった。

「あの女、今日が山場だな」

「山場！？死んじゃうの？」

「よし、あれを実行しよう」

彪は意識を集中する。彪は、相手の妖力を少しだけ、コントロールすることが出来るらしい。

「チカラガホシイ」

悪霊が、すごい勢いでこちらに来た。

「走れ」

彪の言葉に、ほたるも走りだす。葛の木はほたるの肩に、乗っかている。

「いいか。ある程度まで、悪霊を引きつける。そこで、お前が弓を撃つんだ。鬼水晶めがけて」

「うん。・・・撃つた事ないから、成功するか微妙だけど・・・」

「水晶持っていたって、低級は低級。ま、外したら、私が鬼水晶を

取りに行くさ」

彪もほたるもかなり息が上がっている。

絶対に、悪霊を退治しなくては。

悪霊退治 最終話

ハアハアハアハア
息が切れる。

ザアアアアア

川の流れる音がする。

「ほたる、川まで走れ」

彪ヒョウも息が切れている。

ハアハアハアハア

川まで走ってきて、ほたると彪は息を整えた。

どろん

彪は、大きな獣姿に化けた。とにかく大きくて立派だ。銀色の目も、威厳がある。

「そろそろ来るな」

低い声も、いつもより恐ろしさを感じさせる。

「チカラ・・・ホシイ」

「悪霊が来たぞ、ほたる」

葛くずのきの木様が、ほたるをつついた。ずっと肩に乗っていたから、疲れしていないのだろう。

「ほれ、これを使うんじゃ」

弓と矢を取りだし、ほたるに手渡す。

「矢は、予備が1本しかないからな」

「・・・なんか、半端な数ね」

「チカラ・・・クレ!!!」

悪霊が姿を現した。

「来たな、悪霊」

彪が、ピカッと光を出した。白っぽい光が発せられる。この光には、相手の妖力を吸い取る妖力ちからがあるのだ。

「ウワアアアア・・・。コワイ、コワイ」

光が消える前に、ほたるは彪の背に乗った。

「ギャツギャツ」

悪霊が目をふさいでいる。光が消えると、弓を引き絞った。撃てるか分からないけど、もうやけくそだ。

パン

矢が放たれ、悪霊に当たった・・・と思ったら、外してしまった。

「ヨクモ・・・オノレ・・・。オノレ!!」

悪霊が飛びかかってきた。

「くそう・・・。鬼水晶の妖力ちからで、回復が早い。・・・これじゃ、近付くのも危険だ」

彪は、ほたるを乗せたまま空を飛んだ。

「わあ。空、飛べるの?」

「当り前だ」

「感心してる場合じゃないぞ、ほたる」

葛の木様が、ほたるを叩いた。

「そうだ。どうしよう・・・」

「矢なら、もう一本あるぞ」

葛の木様が、矢をほたるに渡した。だけど、撃てる自信が一気に無くなった。

「ええい。悪霊が追ってきている。さっさとどめをささない」と

彪も焦っているけど、ほたるもかなり焦っている。

「どうしよう・・・」

遂につぶやいてしまった。

「私と彪が届くように、意識を飛ばせば、当たるかもしれんなあ」

葛の木様の言葉に、彪もほたるもがくつときた。

「早く言つてよ」

2人で同時に、叫ぶように言った。

「オノレ」

恐ろしい悪霊の声に、ほたるはドキっとした。

「いくぞ」

彪が正面から向かった。ほたるが弓を引き絞る。当たれ、当たれ、当たれ……!!

ひたすら念を込めながら……。

「いくんじゃーほたるー」

葛の木様が耳元で、叫んだ。

パン

矢が悪霊に向かって飛んでいく。

トン

「ギャー……」

悪霊の悲鳴。矢が……。悪霊に……。鬼水晶に当たった。だけ

どそれと同時に何かが光った。

まぶしくて、どこか不気味な、白い光……。

サツと、彪は飛びのいた。

「なんだ、あれは。すごく嫌な感じが……」

「ギ……ア……」

悪霊は、光の中で悲鳴を上げながら消えていった。

「お……終わったよ」

ほたるはため息をついた。

「しかし……。結局、鬼水晶は見つからなかったな……。ただ働きか……」

彪も、ため息をついた。猫の姿に戻っている。

「ありがとう……。ほたる、彪、ありがとう。ありがとう」

葛の木が、涙混じりに言った。

「しょうがない。ま、見つけたら教えてよ」

彪は鬼水晶のことを、まだ言っているらしい。

「悪霊、殺しちゃった……」

「あいつは、正体を失った悪霊だ。殺したことにはならないさ。もしかしたら、成仏しちゃったかもしれん」

彪の一言に、安心した。

とにかく。ほたるは、自分のチカラが初めて役に立ったことが嬉しかった。これで、若菜さんの命は助かる。それに、彪も葛の木様とも出会えて良かった。妖怪のことはあまり好きにはなれないけど。これも、出会いの一つだ。

破片(かけら) その巻(前書き)

あけましておめでとうございます。
今年も、よろしくお願ひします。

破片（かけら） その巻

悪霊退治から、1週間が経った。この日は、学校が休みだった。

ほたるは宿題をやっていた。彪は、アイスを食べていた。

「って、何で彪がいるの？」

叫ぶように言った。

「そりゃ、鬼水晶が見つかって、お前に持ち逃げされたら困るしな」「するわけないでしょ……」
かなり、呆れた。

最近彪は、まるで飼い猫のような扱いを受けている。時々、ご飯をもらっていたり……。最近知ったことだけど、彪はもともと普通の猫だったから、普通の人にも見えるらしい。

「私は、飼い猫ではないぞ」

彪は、ほたるの気持ちを、読み取っている。完全に。

それにしても……。確かに鬼水晶の行方は、気になっていた。なんだろう。なんだか嫌な予感がするよう……。
「まったく。どこにいったんだか。おい、ほたる。午後になったら、

鬼水晶を探しに行くぞ」

彪は、せんべいの袋を開けながら言った。思いつきり、命令口調だ。

午後になった。太陽が痛いくらい照りつけて、探すのが面倒になってきた。それに、彪はほたるの肩に乗っている。意外に重い。

「ねえ、自分で歩いてよ」

「うるさい。地面は暑いのだ」

「こつちだって、暑かしいよ」

ほたるがつぶやくように言ったけど、彪はお構いなしだ。

「水晶は、森の中に落ちているはずだ。悪霊退治したのは、葛の木様の祠がある森だったな。その辺を探してみよう」

「うん……。でもさ、あるかな。そこに」

ほたるは、前から思っていたことを言った。

「む。どういうことだ」

「だって、悪霊を退治した時、すごい力を感じたの。だから、近くにはないんじゃないかな・・・」

「それもそうだ。だが、どこを探すのだ？」

「それは・・・。分からない。あ、でも良い考えがあるよ」

ほたるは、自信あり気に、笑った。

破片（かけら） その貳

「ね、お願いします」

ほたるは、葛の木様くすのぎに、頭を下げた。葛の木様は、考えこんでいる。鬼水晶は、結局見つからないままだ。葛の木様の祠の前には、よく妖あやかしが通る。そのため、鬼水晶について、噂うわさしていく妖あやかしもいるかもしれないと、ほたるは考えたのだ。

彪ひょうも、少々期待したように、葛の木様を見ていた。

「よし、分かった。ほたるや彪には、恩があるから、少し手伝ってやる」

「やったー」

ほたるは、手を上げて喜んだ。

「ありがとう」

ほたるが葛の木様にお礼する。

「お前、神様だから、敬語を使うんじゃないのか？」

彪に、小馬鹿にしたように言われ。ほたるは、ハツとした。

「じ、じ、じ……ごめんなさい」

すごい勢いで謝る。ほたるは敬語が苦手だったのだ。

「良いんじゃない。敬語を使わんくらいで、祟りはしないさ」

葛の木様は、おばさん達が近所の人とお話するときのように、手をパタパタさせて言った。ほたるがホツとしたことは、言うまでもない。

「それじゃ、お願いしまーす」

それでも、極力敬語を使おうと、ほたるは思ったのだった。だって、葛の木様は神様だもの。

森は風の音と、蝉の鳴き声こえでいっぱいだった。夏なのに涼しい。彪も、ようやく自分の足で、歩きだした。

「きびきび歩け。探すぞ」

突然、調子が良くなった彪に、ほたるは半ば呆れていた。

「彪はさ、どうして水晶が欲しいの？」

「妖力が欲しいのさ」

ただ一言返ってきた。

「そんなもの無くても、彪は十分強いのに？」

「持つといて、損はないだろう」

そりゃそうだろうよと、ほたるは心の中で思った。彪のことは、ほとんど知らない。一方で、彪もほたるについては、ほとんど知らない。人、妖怪のことなど解らない。妖怪に、人のことなど解らない。だからほたるには、鬼水晶の価値が解らない。

「この辺だったな」

彪が足を止めたため、ほたるも止まった。悪霊を退治した、あの場所へ、到着したのだ。

「何も感じないよ。やっぱり、無いんじゃないかな・・・」

ほたるは辺りを見回す。

「阿呆か。この場所に無い事くらい、分かっているわ。この周辺を、探すのだ」

前足で、タシタシと地面を叩く。催促するような口調だ。

「分かった、分かった。さっさと探しちゃおう」

もしかしたら、もう他の妖怪が獲ってしまったかもしれないけど。

けれど、彪は葛の木様やほたるのために、悪霊退治を手伝ってくれたのだ。何の関わりもない、ほたるのことを。だから、彪にはお礼しなくてはならない。

その日は、近くにある、麗ヶ原（ひらひら）を探すことにした。原っぱだから、かなり暑い。早めに引き上げないと、熱中症になるかもしれない。彪は、茂みの中などを中心に探していた。ほたるも、しゃがみ込んで探し回る。その様子は、公園でアリを探す子供のようだった。森よりも見晴らしが良いから、一目瞭然だけど。それでも、一応。

ザアアアアアア

風が吹いて、草花を揺らしていく。周囲の木々も、茂みも。そしてほたるの横顔にも、湿った風が吹きつけていった。ジンワリと、汗が出て、流れていく。フウーと、ため息を吐く。

「あー．．．．．無いよー．．．．．」

叫びながら、思いつきり伸びをする。かなり長時間探していたから、腰が痛くなっていた。

「あ？沼がある」

伸びをしたとき、遠くに沼があることに気が付いた。立ち上がり、駆け寄る。

沼の水は、透き通っていてとても綺麗だ。沼の水にハンカチを浸して、ギュッと絞る。そして、ハンカチを顔に当てた。

「冷ったーい」

かなりテンションが上がった。都会に住んでいたほたるにとっては、珍しい光景だったりする。こんなに冷たくて、綺麗な沼なんて。

「見つかったのか？」

突然、横から声がしたため、驚きはしたものの、すぐに彪だと分かった。ハンカチを顔から取って、横を見る。

「無かった．．．」

「だろうな。だいたい、何も感じないのに周辺を探しても意味無いか．．．．．」

呟くように彪は言ったけど、ほたるは聞き逃さなかった。

「先に言つてよ」

「ふん。今気が付いたんだ」

「まったく。葛の木様といい、彪といい．．．．．」
呆れるかぎりだと、ほたるは彪を見つめた。

これで、今日の搜索は終わってしまった。

その後、色々なところを探してみたものの、結局見つからずー
ー．．．．．妖怪たちに、聞き込みをして回ったりもしていた。

1週間後。

「ほたる、今日は朝霧山まで言ってみよう」
彪が提案した。ほたるも山に行くのは面倒だと思ったが、しょうがないと渋々承知した。

バンバンバン

ふいに、窓を激しく叩く音がして、ほたると彪はそちらを見た。窓の外には、雀に乗った葛の木様がいた。

「おはよう、葛の木様」

葛の木様は、かなり慌てている。

「どうした・・・」

ほたると彪は聞こえたのを遮り、

「大変じゃ、大変じゃ」

と、連呼している。

「落ち着け、葛の木」

彪も、ただならぬ葛の木様を見て、近寄ってきた。葛の木様は、ゼエゼエいつている。

「と、とにかく落ち着いて」

ほたると彪は葛の木様に、座布団を出した。チョコン、と座って息を整えている。

「で、どうしたの？」

葛の木様は、ほたると彪を、順々に見て言った。

「良いか。大変なことが起きたぞ」

葛の木様は、深呼吸をした。そして次の瞬間、あり得ないことを口にした。

「鬼水晶が割れたぞ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3341z/>

気まぐれ猫の散歩

2012年1月6日15時45分発行